

「石韻書」と『龍図耳録』

— 異なる語り手による講談と小説 —

阿部泰記

一 はじめに

講釈師石玉崑の語り物『龍図公案』はそのテキストが写本として伝わっており、「石韻書」或いは「石派書」と呼ばれている。⁽¹⁾これが石玉崑と同時代の語り手による作品であり、石玉崑が語ったテキストではないことはすでに指摘した。⁽²⁾一方、『龍図耳録』は石玉崑の講釈を聴いて、それを散文体の小説に書き直したものだと言われる。さきに李家瑞氏は「石韻書」を石玉崑の原作を忠実に反映した作品だと考えて稚拙だと評し、『龍図耳録』は「石韻書」と内容がほぼ一致しているとして、前者が後者を読むに堪える作品に改作したと言った。⁽³⁾「石韻書」はこれまで戦時に紛失したと考えられた時期もあり、⁽⁴⁾李説に反論する研究もまだ出ていないように思われる。⁽⁵⁾

筆者は『龍図耳録』が基づいたテキストが果たして現存の「石韻書」であったかという点に疑問を覚える。両者は基本的には同じストーリーを語ってはいるが、細部において一致しない叙述が少なくない。これは『龍図耳録』が「石韻書」を改作したことだけが原因ではなく、語

り手が同じくないことに由来するのではないかと考える。「石韻書」は石玉崑の叙述をそのまま継承したとは言い難く、『龍図耳録』が別のテキストに依拠した可能性もあるのではなからうか。すなわち筆者は石玉崑↓「石韻書」↓「龍図耳録」という伝承されたと考えるより、石玉崑↓「石韻書」／石玉崑↓「龍図耳録」と伝承されたと考える方が妥当ではないかと推察している。本論では両者の叙述の相違を指摘することに、李説に対する疑問を提起したい。

二 両者の相違(一) — 方言の使用

語り物の面白さは人物の口調をそのまま表現できる点にあり、地方出身の人物を表現するには方言を使用する。『龍図耳録』はその手法を十分に駆使した作品であるが、「石韻書」の語り手はそれが苦手のようである。

『龍図耳録』十二回では、医者臧能が薬酒「蔵春酒」を調合し、安

樂侯が誘拐した婦人金玉仙に飲ませるといふ陰謀を武俠展昭が盜聴する場面がある。

男子道、「娘子你弗曉得。侯爺他乃喉急之人、恨弗得婦人一時到手。吾不趁此時賺他的銀兩、如何能夠發財呢？」（男は言います。「奥さん、あんた分かつたらん。殿様はせつかちで、おなごをすぐ手にしようてたまらん。あたしがこの機に金を騙し取らにや、いつ儲けられるんかね。」）

ところが「石韻書」「巧換藏春酒」では、臧能はまったく呉語を話さない。

忽聽那男子說道、「這個麼、我的妻呀。這如今我是耍名利兩收的哪。」那女子說道、「是什麼事呢？你要名利双收。」……（するとその男の話が聞こえて来ました。「それはね、奥さん。今私は名譽と利益を両方手に入れたんだよ。」女は言います。「何の事？名譽と利益を両方手に入れるって。」）

石玉崑の『龍凶公案』は北京の聴衆を対象に語られた作品であり、彈詞など南方の語り物とは違って江蘇人は主人公たりえないようである。

*

『龍凶耳録』五回では、江蘇人呂佩と若者匡必正が佩玉の所有をめぐる定遠県令包拯の前で言い争う。この場面で呂佩は次のように呉方言を使用している。

又見那人回道、「唔吶是江蘇人。姓呂、名佩。今日狹路相逢、遇見

這個後生、將吾攔住、硬說吾腰間佩的珊瑚墜、說是他的。青天白日、竟敢攔路打搶。這後生實實可惡。求太爺與吾剖斷剖斷。」……

呂佩道、「此墜乃是吾的好朋友送的、并勿曉得多少分量。」（するとその男は答えて、「あたしゃ江蘇出身で、呂佩と申しますが、今日は仇敵相逢うで、この若者に出会いますと、あたしを遮って、あたしの腰に着けた珊瑚の飾りを自分のものだと言い張り、真つ昼間から略奪しようとしたんです。この若者は本当に悪いんですよ。どうか県知事様お裁きくださいまし。」……呂佩は、「この飾りはあたしの親友がくれたもので、重さはいくらか分かりません。」）

「石韻書」「包公上任」でも呂佩は登場し呉語を話すが、その場面は明らかに減少している。

那中年人回道、「唔吶是江蘇人氏。姓呂、名佩。今日在街上閑遊、遇見這個後生、無端的將我攔住、（唱）他道是 三年以前家中失盜 硬將我腰間之物認作賊贓 像我們 南辺人原是斯文一脈 他啣着 精細的胳膊以垣欺良 分明是 無徒光棍來訛詐 誤造非言 万惡非常 他竟敢 青天白日攔去路 若非是 守官衙相近定被了傷 求太爺 剖斷剖斷這件事 秦鏡高懸作主張」……呂佩說、「小人這個扇墜是相好朋友送與我的、不曉得是什麼分兩。」（その中年男は答えて、「あたしゃ江蘇出身で、呂佩と申しますが、今日は街でぶらぶらしていますと、この若者に出会いました、むりやり私を遮って、（唱）言うことには 三年前に強盗入り 腰の飾りを盗んだと 私らは 南方生まれの教養人 目をつけて 鍛えた腕

で人騙す 明らかに ごろつきどもの詐欺行為 言いがかりつけるも甚だしい 恥もなく 真つ昼間から略奪す お役所が 近くになれば殴られた 知事閣下 どうかお裁き下されて 悪者懲らしめ願います」……呂佩は、「私のこの扇子飾りは親友がくれたもので、重さはいくらか分かりません。」

『龍図耳録』はこの部分は「石韻書」と叙述が類似するが、異なる語り手のテキストによったのではないかと推測できる。

*

『龍図耳録』三十二回、白玉堂が書生顔查散と従僕雨墨に接近する場面にも、白玉堂が故意に呉語を交えて田舎者を装って図々しく振る舞い、二人の気持ちを試すことを述べている。白玉堂はこの後には呉語を話さない。(「石韻書」はこの部分を欠いている。)

只見那人対顔生道、「老兄、你評評這個理。你不住吾使得的、就将吾往外這等一推、這不豈有此理麼?……」(するとその男は顔生に向かつて、「貴殿、何とか言ってくれんか。あたしを泊めんでもいいけど、あたしを外に押し出すって、そんな話があるうかね。」)

*

呉語を話す人物は『龍図耳録』九十四回でも登場する。それは四鼠蔣平が陵県(山東)で出会った吝嗇な書生李平山である。彼は蔣平と同船するが、自分が襄陽太守に赴任する金輝に仕えることが決まると蔣平を見捨てる。(「石韻書」は『龍図耳録』一〇五十五回に相当する部分で終結しており、これ以後の部分は存在していない。)

蔣爺聽了是浙江口音、他也打着鄉談、道、「請借一步說話。」……李先生道、「滿好個。吾這裏正愁一人寂寞。」……李平山將眼一瞪道、「萍水相逢、吾合你啥個交情?」(蔣さんは浙江方言を聴くと、やはり方言を話して言います。「ちよっと歩いて話しませんか。……李先生は、「そりゃいいな。あたしゃ丁度一人で寂しかったから。」……李平山は目をまん丸くして、「旅で出会っただけで、あたしがあんたと何の関係がある?」)

*

『龍図耳録』一百十一回では、襄陽府(湖北)の冲霄樓に仕組まれた「八卦銅網陣」に陥って死んだ五鼠白玉堂の遺体を収容するため、智化と丁兆慧は土地の漁師に変装して襄陽王の部下鍾雄の水寨に潜入する。この時、智化は方言を話して見張りを油断させる。校勘本は括弧内に北京語を注記する。

智化挺身来至船頭、道、「住搭(拉)罷。你放麻(嗎)箭吓?男(俺)們四(是)陳起望的。男(俺)当家的老弟兄斗(都)来了、特特給你家大王爺送魚来了。」(智化は身を挺して船先に出て言います。「弓はやめてくださいえ。なんで矢を射るんでさあ。俺たちが陳起望の家のもんで、当主が兄弟とも参上して大王様に魚を届けに来たんでさ。)

*

方言を使用して最も成功したのは、『龍図耳録』二十四回、山西方言を話す材木商屈申がもと包拯の従者李保の家に泊って絞め殺され、二

十五回、豪族葛登雲に監禁されて自尽した書生范仲禹の妻白玉蓮の身体を借りて甦生し、白玉蓮は屈申の身体を借りて甦生して、美女が地方の無骨な男の声を出し、無骨な男が美女の甲高い声を出すという、性倒錯の卑猥さも感じさせる場面である。校勘本は括弧内に北京語を注記する。

倒是婦人応道、「唔。楽子被人謀害、囚了餓（我）的四斃（百）蠅（銀）子、不知咱（怎）的楽子跑到這懷（個）棺材裏来了。」（だが女の方が答えて言った。「うん。俺や人に殺されて、銀四百両取られちもうた。何で俺やこの柩に入り込んだんかのう。」）

ところが「石韻書」「陰錯陽差」では屈申の言葉を山西方言で表現せず、そのおかしさを行動描写によって表現している。

那婦人張開櫻桃口、破鑼一般的声音喊道、「你還訛我不成。」説着、揚手就打。……趙虎説、「開封府里打官司去。」那婦人聽了説、「很好。我正要到開封府中鳴冤的我屈呢。很好。咱們就走。」説着、邁金蓮一步一步的走将出来。（その婦人はサクランボのような小さな口を開け、破れた銅鑼のようなガラガラ声で叫び、「おまえは俺を騙せないぞ。」と言いながら、手を挙げて打ってきた。……趙虎が、「開封府へ裁判に行く。」と言うと、婦人はそれを聞いて、「結構だ。俺は丁度開封府に訴えに行こうと考えていたところだ。結構だ。俺たちは行こう。」そう言って、小さな足を大股でつかつかと歩き出した。）

ただ中央研究院蔵本では、行間に方言音を注記をする表現を取って、

原文に原音を表す文字を記しておらず、発音は講釈師の裁断に任せており、実際の講釈でどれだけ山西方言を反映させたかは不明である。⁶⁾

看了看日色平西、他便慌了道、「楽子還要進城（念陳）咧。天晚（念罔）咧。」……「那婦人他就活了、把小道接住、一頓好打、却是一口的山西話。」……婦人道、「我不是婦人、我的名字叫屈申。只因代着四百（兩）銀子批木頭去、買壳不成、回來晚咧、道兒上見個没主的黑驢。」（太陽が西に傾いたのを見ると、男は慌てて、「俺は城に入らなきゃならんのだ。遅うなつてもうた。」……「その女は生き返ると、私めを掴んで一頓り打ちつけ、山西方言ばかり話していました。」……女は言います。「俺は女じゃない。俺の名前は屈申だ。銀子四百両を持って木材を仕入れに行ったが、交渉がうまくいかず、帰りが遅くなり、途中で主人のおらん黒驢馬を見つけたんだ。」）

三 両者の相違（二）——伝説の処理

方言の使用という点では『龍図耳録』が優れていると言えようが、すべての叙述・描写において『龍図耳録』が「石韻書」に常に優越しているわけではない。

「石韻書」「烏盆記」では、匡必正の叔父天祐が包拯を称賛して

次のように唱っている。

匡天祐道、「列位呀、這位包太爺真是神也仙也。斷事猶如目覩、並且相貌清古、終久不可限量。〔唱〕他老的那 相貌生成貴不可言 坐如鐘 停停端正居公位 而且況 以公為公任事在先 論五閔 自天然 地閣円 更兼天庭高 鼻準隆 耳輪大 漆黑的面光沢 現 從不笑乃是寡容顏 英雄眉秀 虎目雖円 却見慈善 又識凶頑 四方口 善斷善弁 真乃獸中麒麟 鳥中鳳凰。」(匡天祐は申します。「みなさん、この包県令様は本当に神か仙人です。裁きは目撃したように正確、容貌も清逸で、無限の力をお持ちです。〔唱〕「この方の 容貌天成貴くて 鐘のごと 官位に座して威厳あり それに又 常に公事を優先す 五閔(耳目舌鼻身)を見れば天然で 顎は丸く額広く 鼻筋高く福の耳 顔は漆黒黒光り 笑顔をこれまで見たことなし 英雄の眉に猛虎の目 善を見分けて悪見抜き 四角い口は弁が立つ これぞ麒麟か鳳凰ぞ」)

「石韻書」の包拯の容貌描写には、明成化年間刊「説唱詞話」『包待制出身伝』以来の伝説を反映しており、民衆文学らしさが現れている。(註)これに対して『龍図耳録』五回は包拯の容貌描写を行わない。

匡家叔侄將扇墜領回無事。因此人人皆知包公斷事如神、各處伝揚。(匡家の叔父と甥は扇子の飾りを受け取って帰り、事件は終わりました。それ以来人々は包公の裁判が神聖なことを知り、方々にその話が伝わりました。)

これは『龍図耳録』が包拯の容貌描写を忌避したからではないかと思

われる。そのことは「石韻書」「相国寺」と『龍図耳録』六回の叙述を比較すれば、さらに理解しやすい。まず「石韻書」はこうである。

○不知從那里來了一個黑臉的道人用手扶起那玉柱。天子正待宣旨、忽然京醒、乃是一夢。(どこから来たか分かりませんが、一人の色黒の道士が手で玉柱を支えました。天子は召喚しようとなさった時、突然目を覚まされました。それは夢だったのです。)○只見他天庭飽滿、地格方円、身材凜々、相貌堂堂。更兼他黑面如漆、増光大亮。(その顔は額が広く、顎が方円で、身体つきは凜々、容姿は堂々としており、またその顔色は漆黒で、つやつやと輝いておりました。)

これに対して『龍図耳録』は、次のように「形容面貌」という言葉で漠然としか描写しない。

只因王大人面奉諭旨、欽賜図像一張。乃聖上夢中有警、醒來時宛然在目、御筆親画了形容像貌、特派王大人暗暗密訪此人。……王大人仔細看時、形容面貌、与聖上御筆龍図毫無差別。(王大人が親しく詔勅を奉じ、図像一枚を賜ったからです。それは天子が夢に啓示を得て、醒めてまだはつきり覚えていたので、自分でその姿形を描き、特に王大人を遣わして密かにその人物を捜させたものでした。……王大人が仔細に見ると、容貌は天子の描かれた図像と何の違ひもありません。)

*

鍾馗伝説も「石韻書」では記述するが、『龍図耳録』では記述しない。

「石韻書」「烏盆記」では、書生劉世昌を殺害した趙大を誅殺するの

は包拯ではなく、趙大の犯行を目撃した鍾馗像である。鍾馗は民間では邪気を駆除する神として信奉され、その版画を部屋や門に飾る。鍾馗が「包公案」に登場するのは、明万曆二十二年（一五九四）刊『百家公案』二十二回、『曲海総目提要』卷三十六収録の明清戯曲『断烏盆』である。⁸⁾

劉世昌魂魄答道、「除了惡賊夫妻、只有画上的鍾進士在那里。」……
猛聽得惡賊「哎喲」一声慘切、風過後氣下全無、刑下命休。（劉世昌の靈魂は答えて言います。「惡党夫婦のほかには、描かれた鍾進士があそこにおられるだけです。」……突然惡党が「ああつ。」と苦しげな声をあげ、風が吹き抜けると、その息は絶え、その命は奪われていました。）

この場面は『龍図耳録』六回では、包拯が魂魄の証言を得て、趙大の妻を欺いて夫の犯行を供述させ、趙大を拷問して殺すと述べており、鍾馗は登場しない。

包公一声断喝、説、「夾。」只這一個字、不想三木一撮、趙大不禁夾、他就嗚呼哀哉了。（包公が大声で「挟め。」と叫ぶと、その言葉で三本の木に同時に撃たれ、趙大は痛さに堪えず、嗚呼哀しいかなということになってしまいました。）

*

張天師が天狗を射る図は現代の年画でも伝承されており、張天師は子供を護る神として信奉されている。この部分の記述も『龍図耳録』

は簡略である。

「石韻書」「救主盤盒打御」では次のようにこの図の由来を説明している。

有那大理寺正卿司天台文彦博文大人有本啓奏、……（唱）「這今歲 天犬星犯紫辰殿 定生那 儲君不利太子有傷 ……這凶星 破解無非画図一張 現如今 微臣代來請万歲御覽」……画上彷彿 太白金星手拿蛋弓望雲端裡、望着那雲端裡画着一條脇生双翅的大狗。……此画是張仙手中蛋弓專打天狗。……被宋太祖看見追問此画來歷、花蕊夫人跪奏、「此乃是張仙專一能打天狗防護小兒。」因此從宮中傳出這位神仙來咧。（大理寺正卿司天台文彦博大人が上奏され、……（唱）「この年は 天狗が宮殿を侵しおり 必ずや太子出産障りあり ……不吉星 破るは図像この一枚 今茲に臣持ち御覽に呈します」……図には太白金星らしい者が手に弾弓を持って雲を望み、その雲の中には一匹の脇に羽がある大犬が描かれています。……これは張仙が専ら天狗を撃つ図です。……宋の太祖からこの図の來歴を尋ねられ、花蕊夫人は跪き、「これは張仙が専ら天狗を撃つて小兒を護る図です。」と上奏しました。それ以来、宮中からこの神仙が伝えられたのです。）

これに対して『龍図耳録』一回では、単に「図形」と表現して張天師の伝説を記さない。

有西台御史兼欽天監文彦博出班奏道、「臣夜觀天象、見天狗星犯闕、恐于儲君不利、恭繕図形一張、謹呈御覽。」（西台御史兼欽天監文

彦博が文班から進み出て上奏しました。「臣が夜天象を観じますと、天狗星が天闕を侵しており、皇太子のご出産に不利かと存じまして、凶像一枚を制作し、謹んで御覧に入れる次第でございます。」

*

だからと言って『龍図耳録』が一貫して民間伝承を退けているとは言えない。『龍図耳録』十一回では、包拯の三宝の一である遊仙枕の由来について、白熊家の執事白安に次のように述べさせている。

「後來劉天祿醉後失言、説他路上遇見一個顛癩道人、名喚陶然公、説他面上有晦紋、給他一個『遊仙枕』、叫他寄与星主。他又不知星主是誰、故此問我主人。」（後に劉天祿は酒に酔ってうっかりと、彼が途中で陶然公という名の癩病の道士と出会い、顔に凶相が現れていると言われて『遊仙枕』を与えられ、星主に贈れと命じられて、星主が誰だか分からなかったため、私の主人に尋ねたのでした。）

これに対して『石韻書』『仙枕過陰』では、陶然公の名前は述べられず、ただ異人としか述べないのである。

〔唱〕這一日 有個親戚叫劉天祿 他本是 食古未化的一個窮儒
手拿着一宗宝物是遊仙枕 具他說 什麼珍寶也不如 他本是
異人伝授真奇異 若枕着他 夢魂遊遍四岳五湖 指示他 叫他
去到開封府 文正公 日后有用好把患除（この日には 劉天祿と
いう親戚で もともとは 勉強途中の貧書生 その手には 遊仙
枕という宝物 言うことには この宝物は絶品で もともとは

異人伝授の優れもの 枕すりゃ 夢見て世界を旅行する 指図あり 開封府に届ければ 包公が これで難件解決すると）

*

また『石韻書』『七里村』と『龍図耳録』七回を比較すると、『石韻書』では、難事件を夜間でも審理したことが発端となつて、夜間に亡霊の訴えを聴く伝説が生じたと言明している。

這文正公自從上任以來、……不肯拖累無辜之人。所以遇着難審的案件、若要是半夜之間想起根由、也必然立刻升堂辦理。……外人那里知道這個原故。又聽見說審過「烏盆案」合宮中的鬼怪、大家你言我語都説、「這位新任府尹是位活閻羅、白日審人黑夜審鬼。」到处哄揚。（この文正公は赴任以來、……無辜の者に迷惑をかけてはならじと、難事件に遇えば真夜中でもその原因を考察し、すぐに登庁して審理したのです。外部の者はこのことを知るわけもなく、「烏盆案」や宮中の妖怪を審理した話を聞いて、誰もが互いに、「この新任府知事は活きた閻魔で、白昼には人間を裁き、夜中には亡霊を裁く。」と言うようになったのです。）

これに対して『龍図耳録』七回の叙述は簡単で、包拯が寇承御の亡霊騒ぎを静めて陰陽学士を授かったことを伝説の由来としている。

聖上聞聽大悦、愈信「烏盆」之案是實、即封包公開封府尹、加封陰陽學士。……因聖上隆恩過重、用了「陰陽」二字、從此人人伝説包公善于審鬼、日斷陽、夜斷陰、一時哄傳不了。（天子はこれを知りて満悦で、ますます「烏盆案」が事実だと信じ、即刻包公

を開封府尹に任命し、陰陽学士の官位を授けました。……天子の恩寵が勝れ、「陰陽」という言葉を用いたため、爾後人々は包公が亡霊をよく審理し、昼には現世を裁き、夜には冥界を裁くと言い伝え、当時騒がれたものでした。

四 両者の相違(三) — 個別の記事

このほか、両者の叙述には相違が少なくない。

たとえば「石韻書」「九頭案」では、肉屋の周が遊郭から逃亡した娼妓貞娘を殺害して、その首を書生韓瑞龍に豚の頭として売る事件と、それに連鎖して発生する複数の殺人事件を述べている。「龍図耳録」も同じ事件を述べるが、細部において相違を見せている。

まず比較的大きな相違は、娼妓が逃亡した理由である。「石韻書」では、娼妓は「虔婆」(妓楼の女将^{おかみ})馬容花の隙を見て逃亡していたとする。

周屠說道、「這其間有許多的原故、聽我小人伸訴。(唱)這件事本是出人意料之外 老爺聽我講其詳 那一天 我周屠剛然闕鋪板 從外面 來了一女子走慌暴 又見他 滿頭珠翠身穿線繡 進鋪中 遮遮掩掩不住掖藏 口中不住說救命 我小人 見財起意安下了不良 未卜知 他是誰家一個宅眷 …… 這個女子、名字叫作貞娘。只因他父母將他壳到季春院中、被虔婆馬容花朝打暮罵、叫

他接待客人。這女子立志不從、不肯落水。這日、馬容花又將他打扮出來、叫他倚門接客。他可就趁勢兒跑出來了。」(肉屋の周は申します。「これにはいろいろ訳があり、これからご説明いたします。

〔唱〕この事件 まことに意外なこととして 殿様お聴き願います 当日は 店じまいをしてからすぐ後に 表から 女が慌てて 駆け込んで その身には 珠翠の簪刺繡服 店に入り 隠れる場所を探しては 助けを求めておりました 手前めは 金を目当てに悪巧み つゆ知らず 何処のお宅の奥さんか …… この娘は貞娘という名前で、両親から遊郭に売られ、女将の馬容花が毎日打ち罵つて接客を命じましたが、この娘は頑として従わず、身を売ろうとしません。この日も馬容花が娘に化粧をさせて接客を命じましたが、隙に乗じて逃げ出したのでした。)

これに対して『龍図耳録』十一回では、肉屋の鄭が供述して、娼妓宦娘は蔣太守の子に水揚げされるのを嫌って逃亡していたと言い、女将は登場しない。

「他説、他名叫宦娘、只因身遭拐騙、壳入烟花、鴇母強逼落水、他是良家女子、不肯依從、後來因有蔣太守之子倚仗豪勢、多許金帛、偏要梳籠他、……他便瞰空兒脫逃出來。」(「娘が申しますには、娘は名を宦娘と言ひ、誘拐されて遊郭に売られ、女将に身売りを強いられたけれど、良家の娘なので従わず、後に蔣太守の息子が権勢を笠に着て、金をどっさり出して是が非でも水揚げしようとしたため、……娘は隙を見て逃亡したということです。」)

「石韻書」では結末で馬容花は白熊・白安・周屠らとともに包拯の狗頭劊さきで処刑される。

包公説道、「白熊・白安・周屠・侯二這四個人、都是凶財害命、死有余罪。馬容花買良為娼、致使貞娘被人殺死、与自己逼死者無異、理應正法示衆。……」（包公は申します。「白熊・白安・肉屋の周・侯二の四人はみな金目当ての殺人で、死刑でも足りない。馬容花は良民を買って娼妓にし、貞娘を殺させてしまった。これは自分が殺したも同然であり、処刑して見せしめにすべきである。……）」

このほか、「石韻書」「九頭案」には、肉屋の周のほかに、仲買人王三が登場する。包拯が三星鎮で韓文氏の訴状を県令劉賓に見せて事情を聴くと、劉賓は次のように、周屠と仲買人王三を釈放して、韓を取り調べていると答える。

劉賓他 控背躬身回稟道「尊大人 聽卑職將源由言講一番 都只為 此案現在白家卜内 韓瑞龍 ……」(劉賓が 背中を屈めて答えます 「包大人 それがし説明申しましょう これすべて 事件現在白家に起き 韓瑞龍 ……」)

なお別に「石韻書」や『龍図耳録』とも異なる鼓詞『龍図公案』のテキストが存在している。⁽¹⁰⁾ 「石韻書」「九頭案」に相当する『龍図公案』十部十三部は以下のようなストーリーであり、「石韻書」の叙述と共通する箇所もある(○印内の数字は章回を示す)。

〔十部〕①閑好學は肉屋の周から豚の頭として女の首を売りつけられた上、自宅の床下から男の首無し死体を発見する。②趙虎と公孫索

は事件を捜査する。③公孫索は妓女張秀雲が陳州太守の子杜文林を嫌って逃亡したことを知る。

〔十三部〕②包公は妓楼の女將馬氏を召喚する。③馬氏は死体を妓女張秀雲だと認める。包公は大仏寺を尼寺に改め、馬氏を出家させる。

*

「石韻書」「苗家集」では、富豪は農民に高利貸をして借金の返済を迫る。

那董青对着白玉堂説道、「自從我借了員外這十兩銀、麦秋未能歸上、員外爺可就施了恩咧。……公子爺。去年麦秋時節、二十兩銀子我還還不起呢。今年麦秋里如何還的完這八十兩銀子呢？所以我向員外爺屢次的哀求寬限、無奈員外爺他再三不肯允、故此才叫公子爺看見。」(董青は白玉堂に向かって申します。「旦那様から銀十兩をお借りしましてから、秋の収穫にも返済できませんでしたが、旦那様は特別に許してくださいました。……若様。去年の秋の収穫の時に銀二十兩を返済できなかったのですよ。今年の秋にどうして銀八十兩が完済できませんか。それで何度も旦那様に期限を融通していただくよう哀願しましたが、旦那様はどうしても承知なさいません。そこを若様に見られてしまったのです。」)

『龍図耳録』十三回では、借金返済ができない農民に娘を売るよう迫っている。

那老民見白玉堂這樣氣度、料非常人、連称「公子爺有所不知、只是小老兒欠員外的私債、員外要將小女抵債、故此哀求、員外只是

不允。」(老人は白玉堂のこうした度量を見て、並の人間ではないと考え、「若様はご存じなのです。私めが旦那様の借金をし、旦那様が娘を形に取ろうとなさるため、哀願しましたが、旦那様はどうしても承知なさらないのです。)」

同じく「石韻書」「苗家集」では、白玉堂が苗秀親子の金を盗んでいく。

(斬爺) 剛要進屋、只聽見後辺廂一片声嚷說道、「這不用說咧。一定是賊人的詭計。」……却元來是白玉堂由後門走將進來、大搖大擺的走到天平旁邊、伸手掣了四封銀子、揣在懷內。(展さんが部屋に入ろうとすると、裏の方から叫び声が聞こえて、「知れたことだ。きつと賊の悪知恵に違いない。」……実は白玉堂が裏門から入って来て、堂々と天秤の側まで来て、むんずと四封の銀子をつかんで、懷中へ押し込んだのでした。)

これに対して『龍図耳録』十三回では、展昭が先に金を盗み去り、白玉堂に分け前を残して去る。

此時南俠早已揣銀走了。玉堂進了屋內一看、見卓上口剩了三封銀子、……(この時南俠は早くも銀を押し込んで逃げました。玉堂が部屋に入って見ると、卓上には三封の銀子しか残っておらず、……)

「石韻書」「李后還宮」では、包拯が婦人の訴状を見る途中で倒れ、代わって公孫策が婦人の訴えを聴く。

包興兒將這告的人兒帶將過來、先將呈詞接過、通于包公。包公在轎內睜了半天、只見忽然一個冷戰、登時之間在轎內就把呈詞扔將下來咧。……此時公孫策先生却也在後跟隨、一見文正公這番光景、遂和包興說道、「你把那張呈子拿來、我看看。」……(唱)公孫策再三研詰考問端詳 先問道 「婦人你何方人氏？」婦女回言說「我姓楊。」(包興は訴えた者を連れて来て、まず訴状を受け取り、包公に手渡します。包公は轎の中で訴状を落としてしまいました。……この時公孫策先生が後ろに随っており、文正公のこの様子を見て、包興に申しました。「訴状を持って来なさい。私が見るから。」……(唱)公孫策 再三仔細に審問し まず問うは「ご婦人どこのお方かな」 女は「楊と申します」) だが『龍図耳録』二十回では、包拯は法廷で婦人楊氏とその娘の舅趙国盛の訴えを聴いた後に倒れている。

只見從角門進來男女二人、帶在丹墀之下。……包公問道、「那婆子有甚冤枉、訴上來。」……趙国盛上堂跪倒訴道、……包公聽罷、……包公忽然將身一挺、……往後便倒。(門口から男女二人が入り、朱塗りの階下に連れて来られました。……包公は尋ねます。「婆さん訴え事があったら言いなさい。」……趙国盛は法廷に上って跪いて訴えます。……包公は聴き終わると、……包公は突然身を引くからせ、……後方に倒れました。)

「石韻書」「包公遇害」では、展昭が濟南府において難民救済をする場面を描く。

〔唱〕山東旱 苦黎民 比陳州 還更甚 赤地千里 斗米百金
這難民 纔携男抱女各処投奔 ……〔説〕一直的進了濟南府城中、
找了一座錢店、斬爺打開銀袱子、從裡面拿出了二百兩紋銀、換了
按人分散。(山東旱 民の苦は 陳州よりも 甚だし 荒地は千
里 米高騰 難民たちは 子供抱えて奔走す ……〔説〕まつす
ぐ濟南府の城中に入り、両替商を搜すと、展さんは銀の包みを開
いて、中から二百兩の純銀を取り出して交換し、一人一人に分け
与えました。)

『龍圖耳録』二十回にはこの場面はなく、すぐに、展昭が榆林鎮と
いう土地に赴いて物乞いをする婦人に施しをする場面が続く。

一日、来至榆林鎮上。……展爺聽了、抬頭一看、見是個婦人。……
展爺見他説的可憐、一回手、在兜肚内摸出半錠銀子、……(ある
日、榆林鎮に来ました。……展さんは頭を上げて見ると、一人の
婦人です。……展さんは聞いて可哀想になり、さっと腹掛けから
半錠の銀子を探り出し、……)

*

同じく「石韻書」「包公遇害」では、物乞いをする婦人は展昭から金
を受け取っても姑と夫から疑われていない。

〔唱〕那婆子説「媳婦你也歇歇罷 這半日 手不拾片刻工 你自
己 也張羅張羅你吃飯 可憐你 天天乞化在御市中 今日個 幸

喜得遇恩人救命 幫助你 十兩紋銀情分不輕 也是你 孝心感動
天和地 才有這 仗義疎財這恩公」(〔唱〕婆さんは「嫁御よ少し
休まねば 半日も 休まず苦勞するばかり 自分でも 食事を少
しはしなれば 可哀想 毎日街で乞食して 今日だけは 幸い
大恩人に巡り会い 施しに 銀十兩は有難や それこそは 孝心
天地を感じさせ ここにこれ 立派なお方が現れた」
だが『龍圖耳録』二十回では、婦人が姑と夫から疑われ、それに乗
じて悪人が中傷しようとしたので、展昭は「夜遊神」と称して婦人の
貞潔を明かす。

忽聽婆子道、「若非有外心、何能有這許多銀兩呢？」男子接說道、
「母親、不必說了。明日叫他娘家領回去、就是了。」……猛抬頭見
籬門外有一人、忽高声道、「你拿我的銀兩、応了我的事、就該早些
出来。」……(南俠)高声說道、「吾乃夜遊神也。……吾神特来等
候姦人、以明王氏之賢孝、并除姦人的陷害。」(突然婆さんが、「も
し浮気でなければ、どうしてこんな大金ができるのかね。」と言
いますと、続けて夫も、「母さん、もういいよ。明日実家に引き取
ってもらえばいいよ。」……ふと見ると垣根の外に人がいて、突然声
高らかに、「俺から金をもらって承諾したのに、早く出て来ないか。」
……(南俠は)声高らかに、「吾こそは夜遊神である。……吾は悪
人の出現を待ち、王氏の賢明さを証明し、悪人の謀略を駆除しに
参上した。)

*

同じく「石韻書」「包公遇害」では、姉金香を身替りに嫁がせて道士の徒弟と逃亡した妹玉香は別の男と密会する。

那男子聽了、忙又問道、「到是怎麼一件事呢？你到說明白了哇。」

那女子說道、「只因我們家臨街、時常的我倚門而望。不想我們家相離不遠、有座慈雲觀、觀內有一師一徒、出家修行。……（唱）只因爲一念之差終身是錯 竟失身於他活把我坑」（男は話を聞いて、慌ててまた尋ねました。「一体どんな事件だい。はっきり言つてごらんよ。」女は言います。「家は街に面しているので、いつも門から外を覗いていたの。そうしたら家から遠くない所に慈雲觀があり、師匠と徒弟が出家して修行していたの。」）

『龍図耳録』二十回ではこうした場面はなく、玉香は道士の徒弟と話している。

忽聽婦人說道、「你我雖然定下此計、逃匿到此、但不知我姐姐頂替去了、人家依与不依？」又聽道士道、「縱然不依、自有我那岳母对付他、怕他怎的。」（突然女が言います。「私たちはこの計略を決めてここに逃げて来たけど、姉さんが身替りに嫁いで、あちらは納得したかしら。」そうすると道士が、「納得しなくても、お母さんが対処してくれるから心配ないよ。」）

*

「石韻書」「召見展雄飛」では、展昭と王朝・馬漢・張龍・趙虎は山東へ楊玉香を捕らえに行き、そこで包拯の甥包世榮の悪事に苦しむ地保に遇う。

文正公向斬爺說道、「賢弟。我今派你同王・馬・張・趙四個人前往山東捉拿楊氏玉香以完楊老寡一案。」……忽聽隔壁之間有悲啼之聲。別人聽之猶可、单独的趙虎聽見、大叫道、「你們這店家好無道理。」……五位英雄睜眼一看、原來是個地保的形容。……那人說道、「只因爲包太師有一個姪兒、名叫做包世榮、奉太師命上太安州行香。一路上馳駢前往、每站上要紋銀五百兩。」（文正公は展さんに言いました。「賢弟。私は貴君を王朝・馬漢・張龍・趙虎四人とともに山東へ楊玉香の逮捕に派遣してこの楊寡婦の事件を終えようと思う。」……突然隣家から泣き声が聞こえた。他の者はいざ知らず、趙虎だけは聞いて大声で叫び、「この旅館は何て道理を知らないんだ。」……五人の英雄が目を大きくして見ると、どうやら地方じかたのようです。……男は申します。「包太師に包世榮という甥がおります、太師の命を奉じて泰安州へ參詣に行くのに途中駅を經過して行き、どの駅からも純銀五百兩を要求するのです。」）

だが『龍図耳録』二十一回ではこの場面はなく、楊玉香らは開封府へ連行されて審問を受ける。

包興道、「（相爺）出籤叫人往通真觀捉拿談明・談月合那婦人、并伝喚黃寡婦・趙国盛一齊到案。大約伝到、就要升堂、了結此案。」（包興は言います。「（宰相は）令状を出して通真觀に談明・談月と女を捕らえに行かせ、黃寡婦・趙国盛と一緒に法廷に召喚しました。もうじき到着して法廷に上り、この事件も終結するでしょう。」）そして包世榮の事件はずっと後の第四十六回にならないと述べられ

ない。

趙老皺眉嘆氣道、「提起來話長、待小老兒慢慢告稟。只因有位包三公子上太原進香……。」（趙老人は眉を蹙め嘆息して言いました。

「話をすれば長くなりますが、私めがゆっくり申し上げましょう。

包三公子という方が太原へ参詣に行くため、……。）」

また「石韻書」では道士の徒弟は途中で人足に殺害されていたことも明らかになる。

大衆此時全都着了雨咧。……好容易睃見大道旁边有一個孤另另的
人家兒。……斬爺冷眼睃見那個囡、心中有些吃疑。……元來却是一
個死尸、項上帶着一條繩子。……那趙大說道、「小人原以趕脚為
業。只因上月前這厮他僱我的脚驢進京、每日包我人牲口的吃食店
錢、除此之外、每日給錢三百文、誰知到京已後、這厮忽然改變、
行裝扮成一個道童模樣、到太師府內住了。兩天隨即弄了二十封銀
子來、全我回山東交界、昨日住到這里。我全我們渾家見財起意、
就將他灌醉咧、可就把他勒死咧。」（皆はこの時雨に濡れてしま
いました。……やつとのこと大通りの側に一軒家を見つけました。……
展さんはその穀物囡いをじつと見ると、心中疑惑が湧いて来まし
た。……実は一個の死体で、首には一本の縄が巻かれていました。
……趙大は言います。「私めは馬子を生業としておりまして、先月
こやつが私の驢馬を雇って上京し、毎日私と驢馬の食事と宿泊の
費用を保証し、それ以外に錢三百文をくれていました。ところが
上京すると突然様子を変えて道士の徒弟に扮装し、太師府に行つ

て住みました。二三日で二十封の銀子を作り、私と山東の境界に
帰って、昨日ここに住みました。私と家内は金が欲しくなり、男
を酔わせて絞め殺したのです。」

こは前掲の「石韻書」ではない鼓詞『龍凶公案』と類似する。鼓
詞では、南俠展昭が杭州に滞在中の出来事とし、女玉香は、駆け落ち
相手の道士清風が、開封府にいる彼の師匠邢治が龐国丈の要請で包公
呪詛の仕事を得たことを知って、金を無心するために上京した間に、
閻家の家庭教師杜先生と懇ろになり、杜先生はその罪の報いで、展昭
が殺した無頼漢季樓兒の殺人罪のぬれぎぬを着せられる。鼓詞ではま
た、女玉香を逮捕すべく趙虎が杭州へ赴く話を付加し、杭州への途上、
趙虎が太和県吏趙慶から包三公子と包旺の収賄行為を耳にすること、
趙虎が宿の主人張成の家に泊まって男（実は清風）の死体を発見し、
張成から男を開封府から杭州に送る途中で殺したという自供を得るこ
とを述べている。⁽¹¹⁾

五 む す び

以上、「石韻書」と『龍凶耳録』の叙述内容の相違を指摘してみた。
『龍凶耳録』は講釈の聞き書きであると言われ、⁽¹²⁾ 中央研究院本百二
十回末尾にも、

記 此書於此畢矣。惜乎、後文未能聽記。諸公如有聽者、請即続

之。(附記 本書はここで終了している。惜しいかな、後文はまだ記録できていない。諸君の中にもし聴かれた方がおられれば、どうか続けていただきたい。)

と附記しており、もしこれを信じれば、『龍図耳録』は別の語り手のテキストを記録したと考える方が自然である。

「石韻書」の語り手は時々自称して口上を述べている。たとえば『相国寺』では、

這就是当年宋仁宗的上諭。我説書的睇見過。(これが当年宋の仁宗の詔勅です。私語り手も見たことがあります。)

『巧換藏春酒』では、

這個俠客代々都有。就是現在我国大清也短不了這俠客。就只是我説書的不能知道。(この俠客はどの時代にもあるもので、現在我が大清でもこの俠客を欠かすことができません。ただ私語り手が知らないだけなのです。)

と述べている。この語り手が石玉崑でないことは、『南清宮慶寿』上本に、

時字是了不得的。就拿玉崑石三爺他說罷。怎麼就該説不過他、他如今是不出来咧。他到那個書館兒、一天止説三回書、就串十吊錢。

如今名動九城、誰不知道石三爺呢。(時というのは大変なものでして、玉崑石三さんについて申しますと—どうして申せないことがありましよう。彼は今出て来れないのですから—彼はどの書館に行っても、一日三度話をするだけで何千文も稼ぎ、今では北京城

内知らない者がありませんか。)

『天齐廟断后』上本に、

他是跟了文正公一輩子的。有什麼不知道的呢。(彼は一生包公の後に従っているのですから、知らないことはありませんか。)

と述べていることから分かる。(13)

「石韻書」や『龍図耳録』がどの程度石玉崑の原作の叙述を踏襲しているのかについては、原作が発見されなにかぎり考察は難しいが、『龍図耳録』が現存の「石韻書」を改訂して物語を構成したと考えるには、両者の相違が多く、『龍図耳録』の基づいた講釈のテキストがほかにあったと考える方が妥当のように思われる。

注

(1) 双紅堂文庫本には題目に「石韻全本」と冠され、中央研究院本の表紙には、「石派子弟書包公案」と記す。

(2) 拙稿「鼓詞『龍図公案』における石玉崑の原本の改作」(一九九二、東方学八十三輯)参照。

(3) 李家瑞「從石玉崑的龍図公案説到三俠五義」(一九三四、文学季刊第二期。一九八二、王秋桂編『李家瑞先生通俗文学論文集』所収、学生書局)には、狸猫換太子的一段を引いて、「石玉崑的龍図公案、全是這樣笨拙、所以後來聽他說書的人、依他說的事迹、另

作為一書、名為龍図耳録、較原書進歩多了。」(石玉崑の『龍図公案』はすべてこのように稚拙であるため、後にその講釈を聴いた者がその内容に沿って別に一書を作り、『龍図耳録』と名づけたが、それは原書よりかなり進歩した。)と述べる。

(4) 『石派書』は傅惜華編『北京曲芸総録』(一九六二、中華書局)に戦時下で消失したと記していたが、いま台湾の中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館に蔵されており、東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫(長沢規矩也旧蔵書)にもその一部分を蔵する。

(5) 胡士瑩『話本小说概論』(一九八〇、中華書局)には、『龍図耳録』、就是在石玉崑説唱材料の基礎上、改編為章回小説的。故事情節、大致仍存石氏原本之旧、芸術上則有顯著的提高。『龍図耳録』は石玉崑の講釈材料を基礎にして章回小説に改編したもので、ストーリーは概ね石氏の原本のままを残しているが、芸術的には明らかに高められている。(六九二頁)と言うが、胡氏は『石派書』の目録を百本張抄本『子弟書目録』からしか引かず、その体裁を『風波亭』から検証しているところから見ると、胡氏が『石派書』を見たかどうかは疑問である。

(6) 『龍図耳録』(一九八一、上海古籍出版社)「出版説明」には、『龍図耳録』に謝藍齋抄本(汪原放蔵)と同治六年抄本(傅惜華蔵)があり、謝本は同治本より簡略であるため、傅氏が校訂した謝本を底本としたという。中央研究院本も謝本と同じく一回冒頭に『龍図公案』一書、原有成稿、説部中演了三十余回、野史内読了

六十多本」云々の序文があり、叙述も傅氏校訂本よりかなり簡略である。例えば、二十五回では、「且說李保夫婦將屈申謀害、婦人將錢叉子抽出、伸手一封的掏出、携灯進屋。」であるが、校訂本では、「且說李保夫婦將屈申謀害、婦人因不放心、忙將錢叉子抽出、伸手一掏、一封一封却是八包、不由的滿心歡喜、却又是喜出望外。什麼緣故呢？他先前不放心、……携灯進屋。」という具合である。

(7) 拙論「民間における包拯黒臉伝説の形成」(一九九三、東方学八十六輯)参照。

(8) 鍾馗像が証人となることについては、櫻井幸江『唐鍾馗全伝』について「包公説話との関連を中心に」(一九八六、お茶の水女子大学中国文学会報5)第四章参照。

(9) 永尾龍造『支那民俗誌』第六卷(一九四二、支那民俗誌刊行会)、巻頭図参照。六九五頁の解説には花芯夫人の伝説を述べる。

(10) 注(2) 引拙論参照。

(11) 注(2) 引拙論参照。

(12) 孫楷第『中国通俗小説目録』卷六「明清小説部乙」『龍図耳録』一百二十回には、「諸本多無序跋。余蔵抄本第十二回末有抄書人自記一行云、『此書於此畢矣。惜乎後文未能聴記。』知此書乃聴『龍図公案』時筆受之本。聴而録之、故曰『龍図耳録』。」と言う。

(13) 以上、注(2) 引拙論参照。